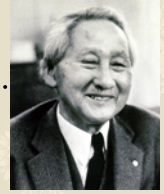
アルバックの恩人たち❶　この人がいなかったらアルバックは消滅していたかも!?

株式会社アルバック 初代社長 石川 芳次郎（いしかわ よしじろう）



創業期アルバックを支えた多大な信用力

株式会社アルバックは実に多くの恩人たちで支えられ、発展してきた。その一人が「石川芳次郎」である。芳次郎は当社の初代社長であるが、設立間もないアルバックにとって、芳次郎の存在は遙かに大きいものがあった。芳次郎がいなかったらアルバックは自然消滅していたに違いないからである。

アルバック設立 10 周年（1962 年）のときの記念写真（左から井街仁、芳次郎、石川浩三）

石川芳次郎のおいたち

1881 年東京に生まれ、13 歳で東京電灯神田発電所に奉公に出される。このとき日本の電気学の草分けでもある藤岡市助博士と巡り会い教えを得る。その後、静岡電灯に派遣され、京都大学・小木虎次郎博士と巡り会う。18 歳のとき、小木博士の取り計らいで名古屋電鉄に移籍し、20 歳の 1901 年に小木博士の紹介を得て大沢善助（大沢商会の創業者）の経営する京都電灯の技手として移籍。小木博士と大沢善助は芳次郎にとって一生を通じての恩人となる。勉学を志す芳次郎は同志社普通学校３年に編入。勉学と仕事を両立させる。1904 年、23 歳で第三高等学校に入学、1907 年には 26 歳で京都帝国大学電気工学科に入学し、1910 年、29 歳で同校を卒業し、京都電灯に復帰。まだ普及が進んでいなかった電気の普及に努める。1911 年と 1919 年には欧米の海外視察を経験する。アメリカでは発明王エジソンと会う。以来、エジソン財団の役員を務める。1941 年・京都電灯副社長、1943 年・京福電鉄社長、1952 年・アルバック（日本真空技術）を設立し、社長就任。公職は実に多く、1969 年に 88 歳で死去するまで、政府機関、団体、民間企業の委員、評議員、会長、終身役員などに推挙され、叙従五位銀杯、勲四等瑞宝章など受章。

●アルバック設立の原動力となった芳次郎の信用力

アルバックの設立に当たって、発起人代表であった石川芳次郎は、財界のおもだった人に出資を要請してまわった。その際、要請された財界人は「石川さんがやるならば」と無条件で百万円の出資を快諾し、しかも全員が取締役にも名を連ねた。その一人が松下幸之助（パナソニック創業者）だった。

当時、海のものとも山のものともわからなかったアルバックの船出に、松下幸之助はじめ６名の財界人の存在は、当社の社会的信用を高める上で大きな力となった。

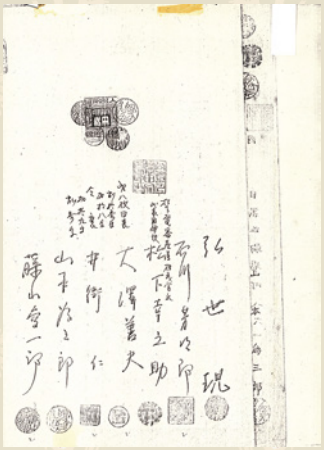
ちなみに 1968 年、設立 15 周年を迎えたアルバックは、横浜市から茅ヶ崎市に新たに本社・工場を竣工した。その祝辞で松下幸之助当時・松下電器産業会長（当社取締役も兼務）は「15 年前（1952 年）は現会長の石川芳次郎さんから、真空技術というものが国家的見地からみて非常に重要であり、その振興開発のために、この会社をつくることが必要であるというお話を伺い、私も大いに共感し、賛同するところがあって、アルバック設立の当初から関係させて頂くことになった」――と述べている。

●「石川さんがやるならば」の一言で著名財界人がアルバック支援

アルバックは、1952 年８月 23 日、当初、日本真空技術株式会社という社名で設立した。社名が示すとおり、日本の産業界ではほとんど活用されていなかった「真空技術」を標榜する会社であった。

設立のきっかけは、米国の真空装置メーカーの NRC 社リチャード・モース社長からの手紙によってもたらされた。その手紙を受け取ったのが井街仁（アルバック第２代社長）で、「真空技術の事業をされるなら支援を惜しまない」というものだった。井街は当時ある研究所の研究員であり、以前から真空技術の学会に参加しており、会社設立についてその学会仲間も賛同した。同時に井街は義弟にあたる石川浩三に相談した。浩三は「会社を設立するとなると我々だけでは無理だ。親父に相談しよう」という。その親父というのが石川芳次郎であった。つまり、芳次郎は井街にとって義父にあたる。

芳次郎は京都電灯の副社長を歴任し、当時・京福電鉄の社長であり、多くの公職にも就いていた。また、芳次郎は京都帝国大学で電気工学を修めた技術者でもあった。井街たちの「真空事業で日本の産業に貢献する」ことに深い理解を示し、全面的にバックアップを約束した。冒頭の財界人６名の強



アルバック（日本真空技術）設立登記簿の一部（発起人兼役員の自筆サイン）

力な支援を得ることになったのである。

このようにして、アルバックの設立に至ったのであるが、当時、芳次郎は71歳という高齢であるにもかかわらず、自ら社長に就き、アルバックが一人歩きできるまで、その職を全うしたのである。

●真空技術の産業貢献をアルバックに託した芳次郎の気概

井街が誘った学会仲間の一人が、アルバックの「研究開発の祖」とも言える林主税であるが、アルバック創立30周年（1982年）に際し、次のようにコメントしている。

「アルバックという会社は非常に運のいい会社であるということです。

それは真空技術という仕事が将来の産業界にとって大切な仕事であることや、必ず社会的にも認められることは初めから確信していたわけですが、それがいつ頃、どういう形でかなえられるかということになると、これは自分で決められる問題じゃないわけですね。

初めの頃は世間がそれを認めていたわけじゃありませんから、赤ん坊のような時期をどうして生き残れたかを考えると、やはり幸運であったとしかいいようがないのです。

30年も続けられたその主な理由は、初代社長の石川芳次郎さんの存在が非常に大きい。石川芳次郎さんの一言で、松下さん、弘世さん（日本生命社長）、大沢さん（大沢商会会長）など社会的に大きな信用力をもった方々に信頼され、その援助が受けられるよう会社の基礎固めをキチンと確保されていたことが大きいですね」

●芳次郎の人間性を物語るエピソード

芳次郎は、アルバックの経営は井街と浩三に任せっきりで、ほとんど口出ししなかった。ただし、資金繰りや受注面では面識の広さを発揮して最大限のバックアップを惜しまなかった。

1957年、大手金属メーカーから林主税が開発した我国初の真空熔解炉の引き合いがあった。そのとき、芳次郎は、「ここは真空の専門会社に任せてもらえないだろうか」と自ら会社に出向いて経営陣にお願いしたという。

また、1960年頃、ある大手金属メーカーから真空溶解炉の注文がもらえなかった。芳次郎は「私が社長に頼んであげよう」と約束した。芳次郎は先方に出向いて受注につなげたのである。

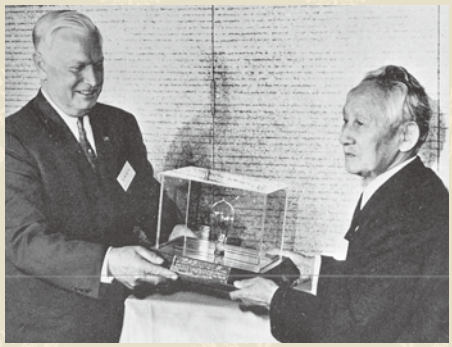
そのときの裏話が残されている。

その社長の学生時代のことである。大学進学に際し、その父親は経済学部を希望していた。ところが、本人は哲学を専攻したいという。その父親は芳次郎に相談した。

「息子さんはいずれ経営にあたられる。経営は人間が相手だから哲学は将来大いに役に立つはずだ。息子さんの希望通りにしては」と助言した。その助言が功を奏して、哲学部への進学が許された。

これらの逸話は芳次郎の人望の厚さと、人知れず真空事業への深い思い入れを示したエピソードであろう。

1960年頃NRC社との交渉のため渡米する芳次郎。芳次郎の右後方にいるのが林主税である



1964年、エジソン財団シスラー会長よりエジソンの白熱電球を贈られる

アルバック初の合弁会社日本リライアンス設立にあたり、リライアンス社の社長夫妻を松下幸之助私邸に招待する芳次郎（後列右から3人目）、ちなみに芳次郎の左が松下幸之助

1966年に制定されたアルバックの社是は、当時の役員が中心となって作成したが、石川芳次郎の企業精神が色濃く反映されている。

1. わが社の生命は永遠である。
2. わが社は人によって興り、人によって滅びる。
3. わが社は利潤を追求する。
4. わが社は社会の公器である。
5. わが社は顧客によってのみ生かされる。
6. わが社は時間を尊重する。
7. わが社は真空技術の総合利用をもって社業とする。